添 付 資 料

1. 港湾倉庫（CWL）視察概要

港湾倉庫（CWL）視察の概要

日　時：2023 年 11 月 6 日（月）10:00～12:00

場　所：アクラ・テマ港地区

参加者：ガーナ・カカオボード ココアマーケティングカンパニー（CMC）

Commodity Warehouse Tema

PRINCIPAL Warehousing and Port Operations Officer

Kwasi Nsiah, Akua Afarwaa Adabo、他

農林水産省食品製造課：佐々木課長補佐

日本チョコレート・ココア協会（株式会社明治）：相澤部長

中央開発株式会社：山口部長

伊藤忠商事株式会社アクラ事務所：梶川所長、大野

カカオ・ゴマ課：竹賀トレーダー

(株)SynecO：江尻、河村

概　要：

アクラのテマ港地区にある日本向けカカオ豆の港湾倉庫（CWL）において、カカオ豆の搬入、サンプリング、水分含有率測定、重量測定等の現地調査を実施した。

CWL における業務内容について、ガーナ・カカオボード ココアマーケティングカンパニー(CMC)の倉庫及び港湾業務主任担当者から説明を受け、意見交換の後、倉庫への日本向けカカオ豆の搬入と、倉庫で行われている品質チェックを視察した。

具体的内容は以下のとおり

（日　本）あいさつ

日本の菓子生産金額のうちチョコレートの割合が最も高くなっています。

日本は、チョコレートの原料であるカカオ豆のほとんどをガーナ国から輸入しています。貴国は、日本市場向けのカカオ豆の重要なサプライヤーであり、日本の菓子産業を支えていただいていると言っても過言ではありません。

貴国と日本には、カカオ取引の長い歴史があります。カカオ豆の安定的な生産と供給をしていただき、この場を借りて感謝いたします。

今年度の事業としては、明日から２日間、日本から貴国に専門家を派遣し、有用植物をカカオの木の周囲に植樹し、農薬や肥料を使わずに耕起も行わない、「協生農法」の技術講習会を実施することとしています。

協生農法は、食料生産と生物多様性の向上やカカオ豆生産農家の所得向上が期

待できるため、技術講習会への御協力をお願いします。

今年度の事業は、貴国のカカオ豆生産農家とサプライヤー、そして日本のチョコレート企業と消費者の両方に利益をもたらすと心から信じています。

（ガーナ）テマ港倉庫 CWL でのガーナ・カカオボード CMC 職員による説明

ガーナでは、カカオ豆は、輸出向けの船積みまでにガーナ・カカオボード傘下の品質部門（QCC）による品質チェックを３回実施している。産地の LBC（公認買付業者）の倉庫において品質チェックが行われ、港湾の倉庫に輸送後に、カカオ豆の受け入れ時と輸出時に２回の品質チェックが行われます。

先週から 船積みが始まったところです。

産地での１回目の QCC チェックが済んだ状態で港湾の倉庫に運ばれてきます。

荷下ろしの後、倉庫へのカカオ豆の入庫時に、 全ての袋について QCC によるチェックが行われます。全袋検査を実施しています。

カカオ豆の水分含有率（7.5 パーセント以下であること）のチェックや品質チェックが行われています。

水分含有率のチェックの他に、全ての袋からサンプルを抜き取りよく混ぜることによって代表的なサンプルを作り、倉庫事務所内のラボで検査を行います。カカオ豆のカウントやカットテスト、比重の検査など品質チェックを行います。

100 グラム当たりの豆カウント、カビ、発芽、発酵など豆の状態や、虫等の混入などカットテストにより品質のグレーディングを行い、輸出基準を満たしているかについてチェックを行います。

日本向けについては、袋にタグを付けて管理を行っており、QCC ラボで残留農薬検査を行い、合格したものだけが輸出されます。

倉庫での燻蒸については、入庫前に倉庫全体の燻蒸を行います。輸出向けのカカオ豆が入庫されると、燻蒸剤により処理を行っています。

カカオ豆の生産地の州や郡、買い付け業者名などが、袋に印字されています。

カカオマネジメントシステム（CMS）による管理を進めようとしています。

QCC の担当者の誰がチェックをしたか分かるようにタグが付けられています。

2. ガーナ・カカオボード
品質管理部門（QCC）
訪問概要

ガーナ・カカオボード品質管理部門（QCC）訪問の概要

日　時：11 月 6 日 12:30～14:00
場　所： ガーナ・カカオボード品質管理部門（QCC）
参加者：カカオボード QCC　Dr. Paul Agyeman（QCC Research Manager）、他
農林水産省食品製造課　佐々木課長補佐
日本チョコレート・ココア協会（株式会社 明治　相澤部長
中央開発（株）　山口部長
伊藤忠商事（株）　アクラ事務所　梶川所長、大野所員
カカオ・ゴマ課　竹賀トレーダー
(株)Synec0　江尻、河村

訪問概要：

佐々木課長補佐より、ガーナへの今回の出張、事業の目的等を伝えた。
先方とのやり取りは以下のとおり

（ガーナ）QCC Dr.Paul

日本とガーナは長い歴史があり、ガーナのカカオ豆輸出のうち約 8～10%近くが日本向けを占めており、重要な輸出相手国です。

カカオボードにとっても、ポジティブリスト制度が導入され、残留農薬等に関する新しい制度が導入されたと同時に、日本向けの残留農薬検査の厳しさは周知されており、基準を満たしたカカオ豆を日本向けに出来るように力を入れてきています。当初は、基準値を超過して検出された事例があったが、日本の協力もあり、日本向けの残留農薬検査体制が構築されました。過去 5 年間では基準値を超える量の農薬が検出された件数は低下してきており、直近 2 年間では残留農薬基準を超えたものはありませんでした。この結果からも、残留農薬基準値を超えるカカオ豆は日本向けに輸出されないようなスキームが構築されています。カカオボード傘下の QCC だけではなく、ガーナ・カカオ研究所 CRIG（Cocoa Research Institute of Ghana:）や品質管理部門 CHED、農家への苗の配布などを行う種子生産部門の SPD(Seed Production Division)との連携により農家への残留農薬の管理の徹底を図っています。

また、日本チョコレート・ココア協会による専門家の派遣などにより、残留農薬検査体制を推進することが出来ています。

カビや重金属など 16 の検査項目の検査が可能です。

（日　本）

農林水産省　食品製造課　課長補佐　佐々木と申します。

本日は、大変お忙しいところ面談の機会をいただき、ありがとうございます。私どもの食品製造課では、食品製造の分野を担当しており、その中には菓子も含まれています。

日本の菓子生産金額のうちチョコレートの割合が最も高くなっています。

日本では、チョコレートそのもののほか、チョコレートをコーティングした商品やチョコレート味の商品など、様々な形でチョコレートが使われています。

日本は、チョコレートの原料であるカカオ豆のほとんどをガーナ国から輸入しています。貴国は、日本市場向けのカカオ豆の重要なサプライヤーであり、日本の菓子産業を支えていただいていると言っても過言ではありません。

貴国と日本には、カカオ取引の長い歴史があります。カカオ豆の安定的な生産と供給をしていただき、この場を借りて感謝いたします。

昨年 11 月にも QCC 本部を訪問させていただき、日本向けカカオの残留農薬分析の状況を拝見しました。

2005 年のポジティブリスト制の導入以降、残留農薬の基準（0.01ppm）が厳しくなり、日本向けカカオ豆は、船積前に残留農薬検査を行うようになりました。

QCC によるカカオ産地への研修やモニタリングの実施により、現在は 2,4-D 及びシペルメトリンの２つの農薬の検査となっており、貴国において 2022 年の残留農薬違反検出はありませんでした。

2023 年も 2,4-D 及びシペルメトリンの２つの農薬について、船積前に残留農薬検査を行うこととしておりますので、御協力をお願いするとともに、船積前検査では一定数（検査数の２～３％）の基準値違反が存在していることから、カカオ産地への研修やモニタリングの実施についても、引き続き御協力をお願いします。

また、日本からは１年に２回、新日本検定協会から技術者を QCC に派遣し、シペルメトリンの検査機器の調整や 2,4-D の新しい検査手法の指導等を実施しておりますが、QCC へのサポートを継続してまいります。

（ガーナ）

ガーナとしても、アグロフォレストリーの重要性の認識もあり、シェードツリーや境界部に植栽するなどの取組も行っているところです。

3. 生産農家への技術講習会概要
（１か所目）

3.1 生産農家への技術講習会（1か所目）の概要

日　時：11月7日 9:00～13:00
場　所：ガーナ国アシャンティ州マンクランソ　アハフォ・アノ南西地区議会
参加者：ガーナ　ガーナ・カカオボードCHED）5人
　　マンクランソ　カカオ生産農家19人
　　日 本　農林水産省　食品製造課　佐々木課長補佐
　　（日本チョコレート・ココア協会（株式会社 明治）　相澤部長
　　中央開発（株）　山口部長
　　伊藤忠商事（株）　アクラ事務所　梶川所長、大野所員、安本
　　カカオ・ゴマ課　竹賀トレーダー
　　(株)Synec0　江尻、河村
概　要：

（日　本）
本日の技術講習会に御参加の皆様、こんにちは。
日本からまいりました、農林水産省　食品製造課　課長補佐　佐々木と申します。
我々日本人が美味しく食べているチョコレートですが、その原料のほとんどは、皆さんに作っていただいているカカオ豆が原料となっています。
ガーナは日本向けのカカオ豆の主要サプライヤーであり、両国間にはカカオ取引の長い歴史があります。
カカオ豆の安定的な生産と供給をしていただき、この場を借りて感謝いたします。
御承知のとおり、近年、SDGｓに代表されるように、グローバル市場から持続可能な調達を目指すことが求められており、日本も例外ではありません。
日本においては、2030 年までに食品企業における持続可能性に配慮した輸入原材料調達の実現を目指すこととしています。
この目標を実現するため、昨年度から、ガーナにおいてカカオ豆を対象とした生産支援事業を日本のチョコレート企業とともに実施しています。
本日は、有用植物をカカオの木の周囲に植樹し、農薬や肥料を使わずに耕起も行わない、「協生農法」の技術講習会を実施します。
協生農法により、持続可能なカカオ豆の生産と供給、生産農家の所得向上が期待できるため、ガーナのカカオ豆生産農家とサプライヤー、そして日本のチョコレート企業と消費者の両方に利益をもたらすことを祈念し、冒頭の挨拶といたします。

協生農法について、日本の専門家（株式会社 Synec0）からプレゼン資料に基づき説明。

プレゼンを踏まえて行われた質疑応答、意見交換については以下のとおり。

（ガーナ）

15～20 年間カカオを栽培しており、様々なシェードツリーも植えていますが、多くの牛がいる中で、品質の高いカカオ豆を継続して生産できる化学肥料や農薬はありますか？

（日　本）

カカオ農園において湿度からくる虫や菌類による害はつきものです。ガーナではカカオボード QCC で厳しい基準に基づいて検査が行われており、化学肥料や農薬についてはものによっては生態系にネガティブな影響を与えることにもなります。しかし、農家が安心して質の高いカカオ豆を生産できることは、ベースラインとして保つ必要はあると考えます。そういった中で、ケミカルに代わるものとして、病気の原因やダメージの原因となるものと、どういったものがインタラクションがあって、どういったものを植えることによって、食物連鎖における上位の昆虫や鳥を呼び寄せることが出来るかを考えることが重要と考えています。

（ガーナ）

ガーナにおいてもオーガニック・カカオ豆が一部で栽培されています。栽培には手間がかかりますが、その分高く買い取ってもらえます。認可された民間の買取業者(LBC)が、カカオ豆の倉庫を一般のカカオ豆と分けなければなりません。オーガニック・カカオ豆の日本向けに需要はありますか。

（日　本）

プレミアムでカカオ豆を売ることが、この技術講習会の目的ではないと考えます。

農家が副収入を得ること、そして持続可能性に配慮したカカオ豆の供給の実現を図ることを目的としていると考えます。

（ガーナ）

導入する資金が必要です。導入資金についてどのようにお考えですか。

環境問題としてアフリカに木を植えることについて、二酸化炭素排出量の問題は、欧州など先進国が環境破壊のきっかけを作ってきた中で、アフリカに対して木を植えることを言うことについてはどのようにお考えでしょうか。

（ガーナ CHED）

諸外国による環境破壊の背景はあるかもしれないが、もっとも影響を受けるのはカカオ農家や産地の人々です。他人事ではなく、自分たちの問題として考えなければならない。周りに助けを求めるだけではなく、自分たちの問題として解決していくことが大事です。

一方、資金については、例えばデモ・ファームを行って、そこをサポートしてもらい、そこで得たノウハウや知識を横展開することはよいのではないかと CHED でも考えています。

導入資金というほどのものではなく、キャッサバなど農家で手に入る有用植物を導入することで、今回の技術講習会で学んだことの実現が可能を考えます。

（日　本）

ガーナ産のカカオ豆は、LBC がいったん引き取りを行って、カカオボードが一括して輸出していることは承知しています。仮に、自分の農場で協生農法に取り組むことになった場合、LBC の倉庫で分別しなければならないという課題もあると思います。そういった中で、EU を中心として、森林デューデリジェンスの取組がすでに始まっているので、今回の協生農法の取組は、そういった課題にも対応できる農法であると考えています。有用植物として何を植えるのかといったことへの支援やモデルファームの取組を、例えば、収量がどのくらい変わったのか、収入がどれくらい増えたのか、といったモデルケースを横展開していくためには、日本のチョコレート・メーカーが会員企業である日本チョコレート・ココア協会とこの取組をよく情報共有して、メーカーに展開出来れば、今後、持続可能なカカオ豆の調達が推進できると考えます。

（ガーナ）

デモ・ファームだけではなく、農家に対する協生農法の研修のサポートはありますか？

（日　本）

日本におけるカカオ豆の輸入の 70%以上がガーナからの輸入です。そうした中で、今回の協生農法の取り組みは、他のアフリカ諸国では例がありますが、ガーナでは初めての取組ですので、何が課題なのか、今後どうすればよいかについては、これから Synec0 社が検証していきます。日本チョコレート・ココア協会や会員企業とも、どういった支援が可能なのか検討してまいりたいと考えます。

（ガーナ）

ガーナにおいても過去には、今日発表のあった協生農法のような農法でレジリエンスのあることはよく承知しており、この技術講習会により、もう一度取り組みたいというモチベーションが生まれました。また、ガーナでは、植えられている樹木は、農家の所有物ではないという制度があるため、そうした制度を変える必要があると考えます。

デモ・ファームのような取組を通じて、さらにモチベーションを上げていきたい。

（閉会）

3.2 生産農家への技術講習会（1 か所目）の参加者名簿

MANKRANSO DISTRICT			
S/N	NAME OF STAFF	LOCATION	STATUS
1	SAMPSON MANU	MANKRANSO	DISTRICT COCOA OFFICER
2	GEORGE OHENE BINEY	MANKRANSO	DISTRICT EXTENSION COORDINATOR
3	CEPHAS LAWEH	MANKRANSO	SENIOR TECHNICAL OFICER
4	EMMANUEL AGBANYO TETTEH	MANKRANSO	DISTRICT POLLINATION COORDINATOR
5	CHARLES ODURO	MANKRANSO	DISTRICT PRUNING COORDINATOR
FARMERS			
S/N	NAME OF FARMER	LOCATION	STATUS
1	EDWARD KWAME YEBOAH	YAWHENEKROM	CHIEF FARMER
2	KWABENA BOATENG	ACHIESO	FARMER
3	MUSAH MOHAMMED	AKWATIAKROM	FARMER
4	CLIFFORD ATAMPUGRI	ABESEWA	FARMER
5	EMMANUEL OWUSU ANKAMAH	ADUGYAMA	DISTRICT CHIEF FARMER
6	ALFRED TEYE	YAWHENE	FARMER
7	ALEX KWAME DUKU	AKWATIAKROM	FARMER
8	KWADWO OPOKU	BOKURUWA	FARMER
9	GABRIEL ASOMA	BOKURUWA	FARMER
10	ADJEI PETER BAAFI	MANKRANSO-BEPOSO	FARMER
11	PATRICK NKRUMAH	APONOPONOSO	FARMER
12	LAWRENCE BOAKYE	MANKRANSO	FARMER
13	MAAL ABEL DARE	FUFUO	FARMER
14	YAYENTEY KUPOOTEY	FUFUO	FARMER
15	STEPHEN K. KOA	POKUKROM	FARMER
16	AGYEI AMPRATWUM	DWENEWHO	FARMER

17	LETICIA A. SARPOMG	MANKRANSO	FARMER
18	WILLIAM BOSOMTWE	MANKRANSO	FARMER
19	LARTEY ISSAC	AFRESINI CAMP	FARMER

4. カカオ農園視察概要

カカオ農園視察の概要

日　時：11 月 7 日 14:30～15:30
場　所：ガーナ国アシャンティ州クマシ地区
参加者：ガーナ・カカオボード（GCB）カカオ健康・普及部門（CHED）
日 本農林水産省　食品製造課　佐々木課長補佐
日本チョコレート・ココア協会（株式会社 明治）相澤部長
中央開発（株）　山口部長
伊藤忠商事（株）　アクラ事務所　梶川所長、大野所員、安本
カカオ・ゴマ課　竹賀トレーダー
(株)Synec0　江尻、河村
概　要：

クマシ地区のカカオ農園において、カカオ豆の収穫から発酵に至るまでの現地調査を実施。

（ガーナ）説明：

・カカオの苗木はカカオボードが農家に提供しており、カカオボードの所有物です。
・受粉してから収穫できるまで概ね 6 か月ほどかかります。
・自然受粉の訪花昆虫はアリなどです。アリはカカオの木の高いところまで登ることができないので、カカオの実は地面近くの位置に多くなります。このため、人工授粉をしています。
・この農園ではカカオ以外の植物も植えられていて、モノカルチャーではない。
・害虫の問題があります。
・雨が多く、湿度が高いと、黒い斑点のようなカビが発生します。そのため、シェードツリーは多過ぎるのもよくない。カカオボードは、1 ヘクタール当たり 20 本のシェードツリーを植え付けることを推奨しています。気候変動の影響のため、1 ヘクタール当たり 40 本までとしています。
・カカオポッドを割ってパルプを取り出し、バナナやプランテーンの葉に包み込み、6 日間発酵させます。2 日に 1 回かき混ぜる。発酵温度は 50℃にもなります。
・天日乾燥は、10 日間から 2 週間です。
・農家の庭先でクラスター（カカオ豆に付着している茎等）を取り除きながら、手で触っても付かない程度まで乾燥させます。
・乾燥させたカカオ豆は、第一集荷所に持ち込まれ、QCC の 1 回目のチェックを受けます。

5. 生産農家への技術講習会概要
（２か所目）

5.1 生産農家への技術講習会（2 か所目）の概要

日　時：11 月 8 日 9:00～13:00
場　所：ガーナ国アシャンティ州ベクワイ地区　YAGUAA　HOTEL INTERNATIONAL 会議室
参加者：ガーナ　ガーナ・カカオボード CHED）5 人
　　ベクワイ地区　カカオ生産農家 14 人
　　日 本　農林水産省　食品製造課　佐々木課長補佐
　　日本チョコレート・ココア協会（(株）明治）相澤部長
　　中央開発（株）　山口部長
　　伊藤忠商事（株）　アクラ事務所　梶川所長、大野所員、安本
　　カカオ・ゴマ課　竹賀トレーダー
　　(株)Synec0　江尻、河村
概　要：

佐々木課長補佐より、カカオ豆の主な供給国であるガーナにおいて、日本国の食品企業における持続可能性に配慮したカカオ豆調達の実現を図るための本事業の目的について、冒頭あいさつとして発言。

協生農法について、日本の専門家（株式会社 Synec0）からプレゼン資料に基づき説明。

プレゼンを踏まえて行われた質疑応答、意見交換については以下のとおり。

（ガーナ）

シェードツリーを植えることのメリットについては理解しているが、本日の講習の協生農法を導入することで、同じ効果が期待できるのか、あるいは、それとは別の効果も期待できるのか、について知りたい。

ガーナは、ブルキナファソとは環境が異なり、すでにアグロフォレストリーのような状態にあり、土壌も肥沃です。そこにさらに協生農法を導入することは過多にはならないですか。

（日　本）

協生農法では、環境に適した作物を探します。野菜は、施肥しない状態にあっては、極端に日が当たり過ぎても、それに応じる栄養や水分がないと、充分に育たなくなってしまうので、むしろ多少日陰があった方が育ちが最適化されると考えます。

（ガーナ側コメント）

本日の講習を聞いて、剪定の必要性を感じました。枝の剪定を行い、新たな有用植物を栽培することが可能になってくることに気が付きました。技術講習会により、そうしたよい効果があると感じました。

（日　本）

閉会にあたり発言

本日のプレゼンにあったように、ブルキナファソなど他のアフリカ諸国では、協生農法の取組実績はありますが、ガーナでは初めての取組です。今後、SynecO 社がガーナに滞在してカカオ農園を訪問するので、ぜひ要望があれば協力をお願いしたい。また、CHED との連携が最も重要ということを理解しました。

ガーナでは初めての取組ですので、今後、モデルファームの構築や、他の地域への横展開など、CHED の協力をお願いしたい。

5.2 生産農家への技術講習会（2 か所目）の参加者名簿

参加者名簿

	BEKWAI DISTRICT		
S/NO.	NAME OF PARTICIPANT	LOCATION	STATUS
1	SAMUEL ATTA FRIMPONG	KENSERE	STAFF
2	ESTHER BENNIEH	ADJAMASU	STAFF
3	ISAAC BOAKYE-YIADOM	KUNTENASE	STAFF
4	ERNEST AGUDU	ADUMASA	STAFF
5	ALEX AMOAH	NKODUASE	STAFF
FARMERS			
S/N	NAME OF FARMER	LOCATION	STATUS
1	EMMANUEL PEPRAH	BEHENASE	FARMER
2	FRANCIS MENSAH	SODUA	FARMER
3	KWAME ATTA OPOKU	BEGROASE	FARMER
4	AWUAH AGYEMANG	ADUAM	FARMER
5	KWADWO OFFE	ADUNKU	FARMER
6	DANSO KENNETH	NEW KOFORIDUA	FARMER
7	AMOAKO YAW	ABENASE	FARMER
8	RICHARD ADU ANSERE	JACOBU	FARMER
9	AKWASI ATTAH	BEPOSO	FARMER
10	SULE MUSAH JOSEPH	PIASE BANKROAGYA	FARMER
11	TWENEBOAH KODUA KWADWO	DOMPOASE	FARMER
12	AGARTHA OPOKU MENSAH	KROM-ADWAFO	FARMER
13	JOSEPH TETTEH	ADUABEN	FARMER
14	THOMAS KWAKU ABORAA	NYAMEANI	FARMER

6. カカオボード・
カカオ健康・普及部門（CHED）
意見交換概要

カカオボード・カカオ健康・普及部門（CHED）との意見交換の概要

日　時：11 月 9 日 13:00～14:00
場　所： カカオボード・カカオ健康・普及部門（CHED）
参加者：ガーナ・カカオボード CHED　Rev. Edwin Afari、Mr Samuel Ankamah

Dr. Paul Agyeman（QCC Research Manager）、他
日 本　農林水産省　食品製造課　佐々木課長補佐
日本チョコレート・ココア協会（株式会社 明治）　相澤部長
中央開発（株）　山口部長
伊藤忠商事（株）　アクラ事務所　梶川所長、大野所員

訪問概要：

佐々木課長補佐より、ガーナへの今回の出張、事業の目的等を伝えた。
先方との意見交換は以下のとおり。

（ガーナ）

CHED は、カカオボードの中でいちばん大きな組織です。主な活動として、ガーナのカカオ農家の収量向上や、肥料の使用量や施肥のタイミングなどの指導を行うとともに、カカオ腫脹性シュートウイルス病（CSSVD）に感染したカカオ農園のリハビリテーションも CHED が行っています。

CHED には、3 千人の職員がいます。活動範囲としては 7 つの全てのカカオの生産州で広域に活動を行っています。いま懸念しているのは、カカオの健康な生育です。農薬の適正な使用に着目して指導を行っています。

カカオボードが導入を図っている独自の CMS（ココアマネジメントシステム）や、欧州森林破壊防止規則（EU Deforestation Regulation/EUDR）のための GPS を使ったマッピングの導入についても CHED が主となり手掛けています。

残留農薬について、カカオ豆の品質向上には、農家での取組が最も重要です。CHED による農家への指導が、残留農薬の問題解決に最も寄与するものと考えています。

アグロフォレストリーについて、CHED は、研究機関の CRIG と種子生産部門の SPD と組んで、ダイナミック・アグロフォレストリー・システムにより、モノクロップな

カカオ農園から、１ヘクタール当たり 40 本のシェードツリーの植え付けを目標として取り組んでいます。

カーボンクレジットやカーボンファイナンスについて、サポートプログラムがあれば情報が欲しい。いろいろと木を植えているが、農家の利益に直結していないため、農家に還元できるような仕組みづくりをしていきたいと考えており、カーボンファイナンスに関心があります。

カカオボード独自の取組であるカカオマネジメントシステム（CMS）については、データ収集はほぼ終わっていますが、トレーサビリティの確立においてまだ課題が残っており、システムに役立つツールの導入や、導入に当たっての研修を日本にサポートしてほしい。

大手製菓メーカーにとっても、トレーサビリティの確立に大きな関心があると認識しています。

カカオボードや CHED の幹部、カカオ農家を日本に招待してほしい。日本の大手製菓メーカーに直接会って、カカオの課題を知り、ガーナに持ち帰って改善していきたい。

カカオ豆から製品までの加工のプロセスを実際に見ることで、農家のモチベーション向上にもつながると考えています。

ファーマーズ・ディでベストヤングファーマーを受賞した農家などを日本に招聘することをぜひ検討をお願いしたい。

（日本）

本日は、大変お忙しいところ面談の機会をいただき、ありがとうございます。

私どもの食品製造課では、食品製造の分野を担当しており、その中には菓子も含まれています。

日本の菓子生産金額のうちチョコレートの割合が最も高くなっています。

日本では、チョコレートそのもののほか、チョコレートをコーティングした商品やチョコレート味の商品など、様々な形でチョコレートが使われています。

日本は、チョコレートの原料であるカカオ豆のほとんどをガーナ国から輸入しています。貴国は、日本市場向けのカカオ豆の重要なサプライヤーであり、日本の菓子産業を支えていただいていると言っても過言ではありません。

貴国と日本には、カカオ取引の長い歴史があります。カカオ豆の安定的な生産と供給をしていただき、この場を借りて感謝いたします。

御承知のとおり、近年、SDGs に代表されるように、グローバル市場から持続可能な調達を目指すことが求められており、日本も例外ではありません。

日本においては、2021 年５月、「みどりの食料システム戦略」を策定し、この戦略においては、2030 年までに食品企業における持続可能性に配慮した輸入原材料調達の実現を目指すとされ、代表的な品目の一つとしてカカオ豆が挙げられています。

この目標を実現するため、昨年度から、貴国のカカオ豆を対象として、持続化可能なカカオ豆の生産支援事業を日本のチョコレート企業とともに実施しています。
本事業の実施に当たり、貴重な支援をいただき感謝いたします。

今年度の事業としては、昨日から２日間、日本から貴国に専門家を派遣し、有用植物をカカオの木の周囲に植樹し、農薬や肥料を使わずに耕起も行わない、「協生農法」の技術講習会を実施いたしました。２か所の技術講習会では、CHED のスタッフや農家の関心が高いと感じました。

協生農法は、食料生産と生物多様性の向上やカカオ豆生産農家の所得向上が期待できます。さらに、今回、技術講習会を実施した地域以外への横展開や日本のチョコレート企業と連携した取組へ発展することで、相乗効果が期待できます。

今年度の事業は、貴国のカカオ豆生産農家とサプライヤー、そして日本のチョコレート企業と消費者の両方に利益をもたらすと心から信じています。

本事業を契機として、貴国と日本との間で、持続可能性に配慮したカカオ豆の安定的な生産と供給が、より強固となることを期待しています。

本日は、貴重なお時間をいただき、ありがとうございました。

7. 生産農家への技術講習会
プレゼンテーション資料